

2022 年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告 (第 3 報)

—3 年次末の進路決定状況についての速報—

神谷哲司・後藤武俊・佐藤克美・若島孔文・甲斐健人・小嶋秀樹
東北大学大学院教育学研究科

要約

本研究は、2022 年度(令和 4 年度)入学生から始まった新たな学部専門教育課程のありかたを検討するため、指導教員が決定し 1 年経ち、進路選択の意思決定を求められる 3 年次後期授業終了時に学生を対象にアンケート調査を実施し、進路選択意思決定状況ならびに希望する進路の状況を明らかにすることを目的とした。2025 年 1 月 16 日から 1 月 31 日までの間実施されたオンライン調査で 51 名(回収率 68.0%)から回答が得られた。主な結果は以下の通り。2 年次で高かったコース所属感はやや減少したが、コース所属感よりも研究室所属感の方が高いことが示された。4 年次進級時の感情価については、よりアンビヴァレントであり個人差も大きかった。進路選択状況については、大学院進学、公務員、民間就職と概ね本学部の卒業生の実績と同様の割合を示すとともに、進路をより明確に絞り込みながらも、多様な活動を行っていることがうかがえた。大学生活や学部での学びの満足度は全体としては満足している傾向が示されたものの、そうでない学生も一定数確認され、その背景について検討する必要性が指摘された。

キーワード ; カリキュラム, 教育学, 進路選択, 学部教育, 大学院進学

【背景と目的】

2022 年度入学生から始まった東北大学教育学部の新カリキュラムについて、これまで、コース意思決定を行った 1 年次終了時(神谷・後藤・佐藤・小嶋・野口,2023),ならびに指導教員決定を行った 2 年次終了時(神谷・後藤・佐藤・若島・小嶋・野口,2024)における希望進路等、新カリキュラムに関するアンケートの結果について報告してきた。前報(神谷ほか, 2024)では、卒業後の進路の検討先についての 1 年次との比較において、「東北大学への大学院進学」は大きく減少はしていないものの、全体として民間企業の多さは変わらず、国家・地方公務員の選択肢を新たに選ぶ学生の多さが顕著であった。また、大学院の進学についても、必ずしも教育学研究科だけではなく、学内外の他研究科も含めて、多様に検討している姿が示唆されていた。

こうした流れを踏まえて、本報においては最終学年である 4 年次への進級を控え、進路意思決定についても本格化する 3 年次終了時点における進路決定状況を中心とし

た基礎集計を報告する。なお、本報告は本企画研究を年度内で報告する必要から、データ収集開始から2週間でのデータをもとに速報として報告を行うものである。

【方法】

3年次のカリキュラムを終えようとする時点において、2022年度入学の学部3年生を対象にアンケート調査を行った。アンケートはGoogle Formsで作成され、フォームの冒頭に調査の趣旨と、2022年度入学生の新カリキュラム1期生を対象とした追跡調査であることを踏まえて協力依頼が説明されるとともに、協力は任意であること、入力にあたってはメールアドレスが収集されること、そのメールアドレスは追跡調査のデータ連結のためだけに使用され、分析担当者以外は目にしないこと、分析にあたってはメールアドレスが削除されたものを分析に使用し、統計的に処理するとともに、自由記述欄のコメントも誰のものかわからないものとして処理すること、などが明記された。

調査時期は、2025年1月16日の夕刻に、1月31日を一端の締め切りとして対象となる学生にアンケート協力依頼のメールを一斉に配信するとともに、学部の掲示板やSNSで協力を呼び掛けた。その後、3度にわたるリマインダメールを送信し、同月31日19時時点でのデータを今回の分析対象とした。調査対象となった学部3年生の在籍人数は75名であり、そのうち51名から協力が得られたこととなる（回収率68.0%；教育学コース20名、教育心理学コース31名）。

3年次の具体的な調査項目は以下の通り。

Q1: 現在所属するコース：教育学コースと教育学コースの2択で尋ねた。

Q2: 所属するコースへの意識（コース所属感）：現在所属しているコースについてどのように認識しているのかについて、「あなたは、現在所属しているコース（教育学コース、教育心理学コース）について、以下のようなことについてどのように感じていますか。「そう思う(5)」から「そう思わない(1)」の中から、最も当てはまるもの1つにチェックを入れて下さい」と尋ねた。質問項目は、原田・滝脇(2014)の社会的居場所尺度などを参考に独自に5項目作成した。

Q3: 現在の研究室所属（指導教員の決定状況）：留学、休学、習得単位不足等の理由で3年次終了時においても研究室所属（指導教員）が決定していない学生もいる可能性があることから、調査時点で指導教員が決定しているかどうかを尋ねた。また、Q3-2として、Q2で尋ねたコース所属感の「コース」の表記を「現在の指導教員の研究室」に置換し、所属する研究室に対する所属意識(研究室所属意識)を尋ねた。選択肢も「そう思う(5)」から「そう思わない(1)」の5件法であった。

Q4: 所属する研究室について、2年次希望調査時点での希望順位:現在所属する研究室について、2年次の希望する指導教員の本調査での希望順位について尋ねた。

Q5: 4年次進級にあたっての気分：1年次に指導教員決定について考えた時の気分，2年次に3年次に進級するにあたっての気分を尋ねたのと同様，「現在，最終学年への進級を控えて，東北大学での学びもまとめの時期となり，卒業研究に取り組むこととなります。このことについて考えた時，今あなたはどのような気持ちですか。」と尋ね，「非常にあてはまる(6)」から「ほとんどあてはまらない(1)」の6件法で回答してもらった。1,2年次同様，感情価の測定については，一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木，2000）の24項目のうち，3つの下位尺度（肯定的感情，否定的感情，安静状態）から4項目ずつ採用し，12項目尋ねた。分析に際しては下位尺度ごとに平均値を算出した。内的整合性は，肯定的感情で $\alpha=.94$ ，否定的感情で $\alpha=.89$ ，安静状態で $\alpha=.85$ であった。

Q6: 卒業後の希望進路（複数回答）：2年次と同様，「卒業後の進路について現時点で検討しているもの」を複数回答で回答してもらった。その際，2年次と同様，1年次において選択肢にあった「東北大学の大学院進学」という選択肢を「東北大学大学院教育学研究科への大学院進学」と「東北大学の他の研究科への大学院進学」に細分化して，9項目とした。

Q7: 卒業後の希望進路（単一回答）：さらにQ6の希望進路選択先から，「現時点であなた自身が卒業後の進路として第1志望としているものはどれですか？」と尋ねた。

Q8: 卒業後の進路決定に関する活動状況として，「大学院進学のための情報収集や勉強」「公務員試験の勉強」「教員採用試験の勉強」「その他資格取得のための勉強」「大学院入試対策講座の受講」「公務員講座・教採対策講座の受講」「企業のインターンシップに参加」「業界研究や企業研究」「セミナーや就活フェアに参加」「キャリア支援センターの個別相談の活用」「就職エージェントの活用」「就職支援団体の活用（専属メンターとの面談など）」「起業準備中あるいは既に起業中」「進路決定のための自己分析」「その他」についてそれぞれ該当するものをチェックしてもらった。

Q9: 大学での学生生活全体についての満足度：昨年同様「大変満足している(5)」から「まったく満足していない(1)」の5件法で尋ねた。

Q10: 教育学部での学びの満足度：3年次も終わり学部専門科目の履修も終盤を迎えていることから，教育学部での学びの満足度について，「現時点における東北大学教育学部での学び（学修状況）についての満足度をお聞かせください。」と尋ね，「大変満足している(5)」から「まったく満足していない(1)」の5件法で回答してもらった。

【結果と考察】

まず，Q2 コース所属感についてしてみると，「3.今でも現在所属するコースでよかったのか悩んでいる」，「4.現在所属するコースには自分の居場所があると感じている」の2つ以外はいずれも，「そう思う」「ややそう思う」で80%を超えており，先の2項

目も 80%弱であったことから概ね所属するコースに対する所属感は得られていることがうかがえるが、2年次ではおおむね 90%を超えていたことから、コースへの所属感若干減少している方向にある可能性が示された (Table1)。

Table1 コース所属感

	やや そう思う	やや そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	そう 思わない
1.現在所属するコースを選んでよかったと思っている。	32	15	2	1	1
2.現在所属するコースのカリキュラムで学ぶのが楽しみだ。	23	19	7	2	0
3.今でも現在所属するコースでよかったのか悩んでいる	2	6	4	18	21
4.現在所属するコースには自分の居場所があると感じている	17	23	7	3	1
5.現在所属するコースでの学びで自分が成長できそうだと感じている。	25	18	7	1	0

N=51

一方、研究室の所属感については、「1.現在所属する研究室を選んでよかったと思っている。」「2.現在の指導教員の下で研究を進めるのが楽しみだ。」「5.現在所属する研究室での学びで自分が成長できそうだと感じている。」の3項目で「そう思う」「ややそう思う」が 90%を超えており、研究室への所属意識の方がより強くなっている様子うかがえている (Table2)。

Table2 研究室所属感

	やや そう思う	やや そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	そう 思わない
Q3_2_1.現在所属する研究室を選んでよかったと思っている。	39	9	2	1	0
Q3_2_2.現在の指導教員の下で研究を進めるのが楽しみだ。	30	17	3	0	1
Q3_2_3.今でも現在所属する研究室でよかったのか悩んでいる。	4	3	6	15	23
Q3_2_4.現在所属する研究室には自分の居場所があると感じている。	27	16	3	4	1
Q3_2_5.現在所属する研究室での学びで自分が成長できそうだと感じている。	30	20	1	0	0

N=51

所属研究室の希望順位については、第1希望が86.3%、第2希望が11.8%、本調査での第1, 2希望ではなかった者が2.0%であり概ね希望する研究室に所属していることが示された（Figure1）。

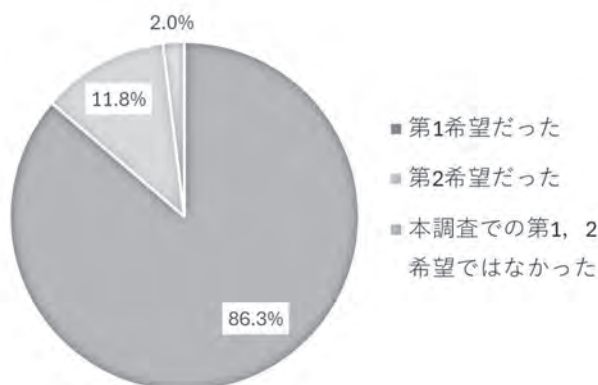


Figure1 指導教員希望調査における希望順位

次に4年次進級の気分について、肯定的感情、否定的感情、安静状態の平均値をTable3に示す。また、参考値として神谷ほか(2024)で報告した1, 2年次の縦断データ(N=51)の値も示す。ただし、本報告の3年次データはこれら1, 2年次データとすべての個票が対応しているわけではない点に留意が必要であり、またそのため平均値の差の検定は行っていない。ただ、数値のみに目を向けると肯定的感情が減少し否定的感情が増加していること、また、安静状態も含め分散（標準偏差）が大きくなっていることがうかがえる。

Table3 3年次までの年度末に進級を控えた時点での感情価

	3年次 ³⁾		2年次 ²⁾		1年次 ¹⁾	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
Q1_3PA (肯定的感情)	4.33	1.17	4.80	0.90	4.13	0.73
Q1_3NA (否定的感情)	3.66	1.11	3.49	0.90	4.05	0.95
Q1_3CA (安静状態)	3.36	1.10	3.44	0.90	3.35	0.97
	N=51		N=51 ⁴⁾		N=51 ⁴⁾	

¹⁾ 指導教員決定について考えた際の感情(1年次)

²⁾ 3年次進級について考えたときの感情(2年次)

²⁾ 4年次進級について考えたときの感情(3年次)

⁴⁾ 神谷ほか(2024)で報告された1, 2年次連結データに基づくためN=51となっている。

Q6 の卒業後の進路として検討していること（複数回答）について、Figure2 に示す。これも参考値として 2 年次の数値(N=57)を示すが、データは必ずしも対応してはいない。ただ、すべての選択肢において 2 年次に比して度数は減少している。その理由を確認するために、複数回答である Q6 の質問において 1 人あたりいくつの選択肢にチェックしていたかを確認すると、2 年次では 1 人あたり 2.23 個 ($SD=1.02$) チェックしていたが、3 年次では 1.69 個 ($SD=0.64$) であり進路が絞り込まれてきていることがわかる。

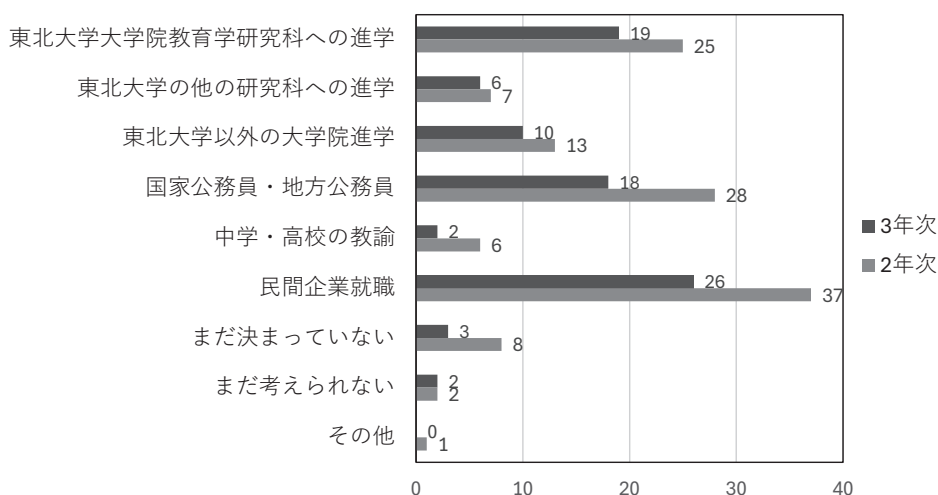


Figure2 卒業後の進路として検討していること（複数回答）

そこで、卒業後の進路として選んだ単一回答の結果を見てみると、東北大学大学院教育学研究科への進学、国家公務員・地方公務員、民間企業就職がそれぞれ 14 名となっており、概ね 1/3 ずつとなっている（Figure3）。これはおおむね本学部の進路状況を反映しているものであり、先述の進路が絞り込まれている状況とともに概ね卒業後の進路が定まってきたことを示すものであるともいえよう。ただ、進路を複数回答で尋ねた Q6 では、1 名の回答者が選択した項目数の最大値が 4 であったこと、「まだ決まっていない」「まだ考えられない」にチェックした学生もそれぞれ 4 名、2 名おり、進路に悩む学生がいることも見逃すわけにはいかないであろう。また、参考までに、Figure3 には 2 年次のデータも付しているが、これも必ずしも 3 年次データと回答者は対応していないので、その点留意が必要である。その点を踏まえて 2 年次との進路について比較してみると、教育学研究科への院進学と国家公務員・地方公務員が増加し、民間企業就職が減少していることが確認できる。この東北大学大学院教育学

研究科への院進学が増加した点については、教育学研究科以外の東北大学の大学院への進学、ならびに他大学への大学院への進学が減少している点を踏まえると、研究室所属を踏まえて、本研究科への進学を選ぶようになった可能性も考えられるが、データが対応していない点を踏まえると、2年次に比して3年次では院進学者が本アンケートにより多く協力している可能性もあり得、この点についてはデータを対応させた縦断データで確認をする必要があるだろう。

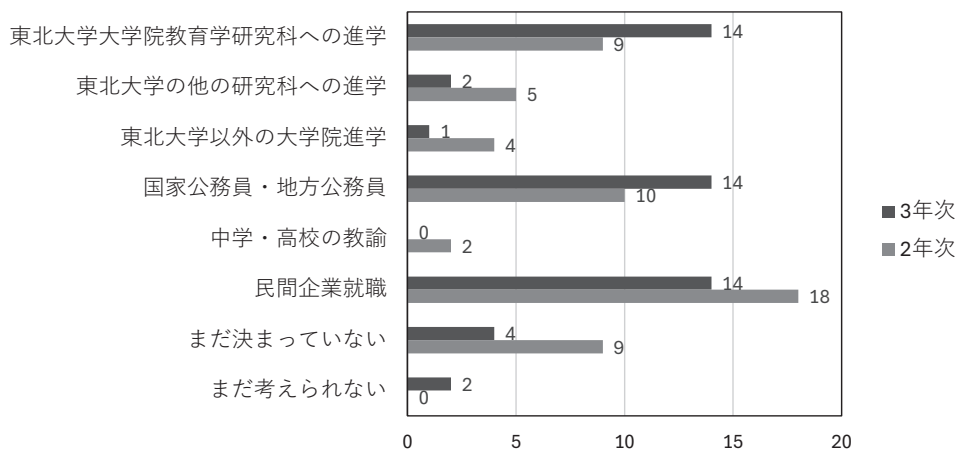


Figure3 卒業後の進路として検討していること（単一回答）

Q8では、卒業後の進路決定に関する活動状況を尋ねたところ、「企業のインターンシップに参加」が27名と最も多く、ついで「大学院進学のための情報収集や勉強」「進路選択のための自己分析」が21名、「業界研究や企業研究」「セミナーや就活フェアに参加」が20名となっていた。先の択一式による第1志望の進路選択の設定では、東北大学大学院教育学研究科への進学、国家公務員・地方公務員、民間企業就職がそれぞれ14名となっていたことを踏まえると、それぞれ進路として第1志望は定めつつも、様々な選択肢について検討。吟味をしていることがうかがえる。

Q9,Q10では、東北大学での学生生活の満足度と、現時点での東北大学教育学部での学びの満足度について尋ねた（Figure5,6）。これらの質問についても参考までに2年次のデータ(N=57)¹を併記しているが、個票は必ずしも対応していない。東北大学背の学生生活（Q9）については、「大変満足している(5)」と「4」で2年次と同様82%ほどであり、概ね満足しているものと思われる。また、教育学部での学びの満足度についても、「大変満足している(5)」と「4」を合わせて2年次では77.2%であったのが、

¹ 神谷ほか(2024)で報告した2年次みのデータサンプルによる。

3年次では82.3%となっており微増している。ただし、「2」を選択した者も2年次では5.3%であったのが、3年次では11.8%となっており、満足できていない学生も増えていることが見て取れる。

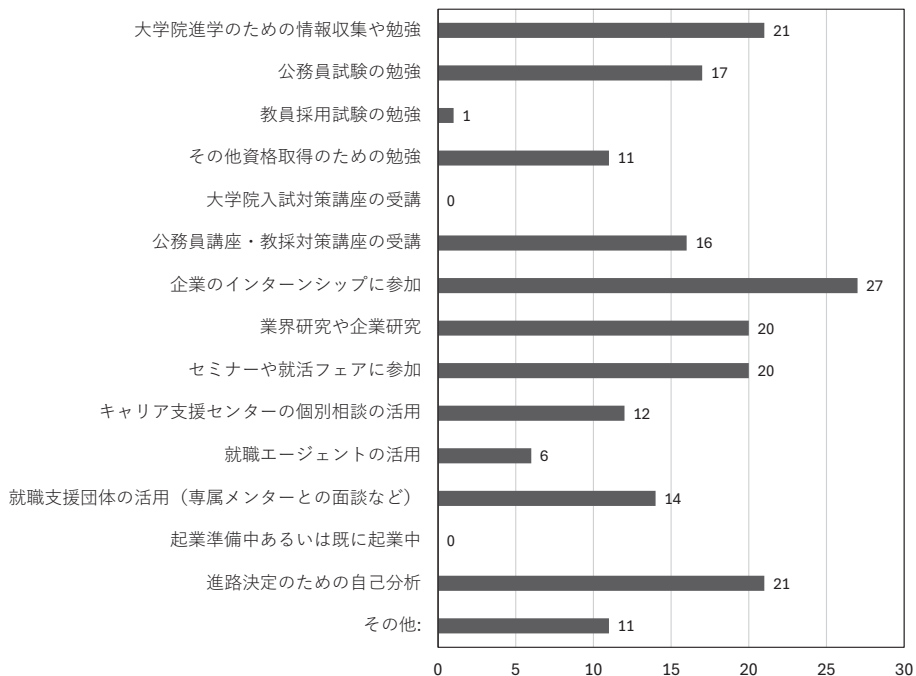


Figure4 卒業後の進路決定に関する活動状況

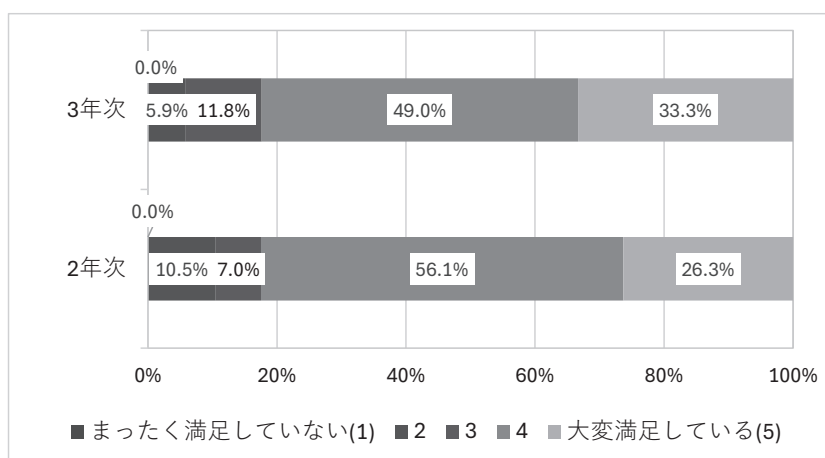


Figure5 現時点での東北大学での学生生活満足度

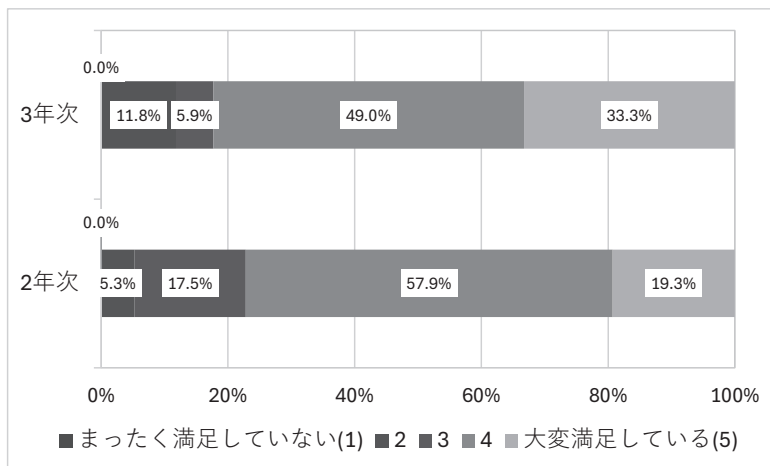


Figure6 現時点での教育学部での学びの満足度

【まとめ】

本報告では、2022 年度より開始された新カリキュラムについて、2022 年度入学の 1 期生（2024 年度の 3 年生）を対象に進路選択状況を中心に検討することを目的とした。主な結果として、以下の点が確認された。1) コース所属感は 2 年次末よりも減少している傾向が確認されたが、研究室への所属感は「そう思う」「ややそう思う」との回答が 90% を超えており、コースというよりも研究室への所属感が意識されていることがうかがえた。2) 対応付けられたデータではないので、解釈に留意は必要であるが、4 年次進級時の感情価については、2 年次に比べて肯定的感情が減少し否定的感情が増加しており、また、安静状態も含め分散（標準偏差）が大きくなっていることが確認された。3) 卒業後の進路として検討していることも複数回答では、2 年次よりも全般的に選択される数が減少しており、3 年次末になって進路が絞り込まれてきていることがうかがえた。また、大学院進学、公務員、民間企業就職の割合が概ね 1/3 ずつであり、本学部の実際の進路選択状況と同様の結果が示されていた。4) 一方で、進路決定に関する活動状況に目を向けると、「大学院進学のための情報収集や勉強」「進路選択のための自己分析」「業界研究や企業研究」「セミナーや就活フェアに参加」といった活動が 20 名を超えており、進路を一つに絞りつつも、多様な活動を行っている可能性も示唆された。5) こちらも対応のあるデータではないため留意が必要ではあるが、東北大学での学生生活や教育学部での学びについて 8 割前後が概ね「満足している」との結果であった。一方で、教育学部での学びについてどちらかと言えば満足していないを示す「2」を選択した者も 11.8% おり、その背景について検討する必要があるものと考えられた。

繰り返しになるが、本報告における 2 年次とのデータの比較は、神谷ほか（2024）

で報告されている統計値との照合であり、本報告で協力が得られた 3 年次のデータとの対応がついているわけではない。今後、1 年次からのデータについて対応づけることで、より精緻な学生生活に対する意識のトラジェクトリを明らかにするとともに、新カリキュラムのねらいであった学部からの大学院進学者の増加がどの程度果たされたのかについての検証を行うことが求められる。

【謝辞】

2021 年度の学部カリキュラム改革ワーキング・グループのメンバー、ならびに令和 3, 4 年度の教務委員会委員、教務係のみなさま、回答に協力頂いた学生のみなさまに感謝申し上げます。

【付記】

本報告は、2024 年度東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター2024 年度「プロジェクト研究（企画研究）」課題名「2022 年度教育学部新カリキュラムに対する学生意識調査 —3 年次末の進路決定状況を中心に—」（研究代表者：神谷哲司，研究組織：小嶋秀樹・甲斐健人・佐藤克美・後藤武俊・若島孔文，申請額申請額：¥246,440）として実施されたものの一部である。なお、本研究に関する利益相反はない。

【文献】

- 原田克巳・滝脇裕哉.(2014). 居場所概念の再構成と居場所尺度の作成. 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 6, 119-134.
- 神谷哲司・後藤武俊・佐藤克美・小嶋秀樹・野口和人 (2023). 2022 年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告（第 1 報）—1 年次学部専門科目の履修とコース決定を終えて—. 東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター年報, 23, 1-11.
- 神谷哲司・後藤武俊・佐藤克美・若島孔文・小嶋秀樹・野口和人 (2024). 2022 年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告（第 2 報）—2 年次末の指導教員決定に向けて—. 東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター年報, 24, 1-18.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人. (2000). 一般感情尺度の作成. 心理学研究, 71 (3), 241-246.